



ロンドンから帰って(36歳)  
画像提供: 日本赤十字看護大学史料室



三陸大津波救助活動(左)(23歳)



弘済丸船長(27歳)



晩年のタケ(62歳)



五日市出張所前の胸像  
MAP D3

## 世界へ

明治40年(1907年)(34歳)のとき、パリに行く伏見宮家・山内侯爵夫人の健康管理のため同行、国際看護婦協会(ICN)ロンドン大会への出席など約2年間ヨーロッパで生活し国際的な活動をする。

帰国後、日本赤十字病院に復帰し、明治43年(1910年)には日本赤十字病院の看護婦監督に就任。

大正9年(1920年)(47歳)にタケの数々の功績が認められ、第1回フローレンス・ナイチンゲール記章を日本人として初めて受賞した(同年に、日本赤十字社がシベリアのポーランド孤児を救出した際には、ウラジオストク経由で日本に渡った孤児の介護を指揮している)。

明治43年(1910年)の日本赤十字病院看護婦監督就任から、亡くなるまでの28年間に監督として2,700人あまりの看護婦の養成・指導にあたった。日本赤十字社は盛大な病院葬をもって長年の功績に報いた。

これらの功績を大勢の方に知ってもらうため、あきる野市役所五日市出張所玄関前には「萩原タケ女史 人道のため国家のため」と題した胸像が建てられた。今でも訪れる方が後を絶たない。

胸像に記された「人道のため国家のため」という言葉は、タケが明治42年国際看護婦協会のロンドン大会に出席し、ナイチンゲールを訪ねた際、ナイチンゲールから贈られた言葉の一部である。

(参考文献)「秋川流域人物伝」・「多摩のあゆみ」・「郷土あれこれ」・「五日市町史」

## フローレンス・ナイチンゲール記章

傷病者の看護の向上に献身し、人道博愛精神の昂揚につくした女史の偉大な功績を永遠に記念し、看護活動に顕著な功労のある人を顕彰するもの。第8回(1907年)および第9回(1912年)の両赤十字国際会議の決議に基づいて制定された「F.ナイチンゲール基金」によって創設され、F.ナイチンゲール女史の生誕100周年を記念して1920年に第1回の記章が授与された。



画像提供: 日本赤十字社

## もっと知りたいゆかりの地

### 勸能学校跡

MAP E3

五日市小学校の前身。明治6年太子堂を改修して勸能学舎を開設したのが始まり。萩原タケが通った学校でもあり、五日市憲法案起草者の千葉卓三郎も教鞭を取っていた。

学校跡には東町観音堂があり地域の方々が大切に守っている。そこに鎮座する阿弥陀如来坐像は市有形文化財にも指定されている。



あきる野市五日市164番地

## 医療 萩原タケ 1873 - 1936

【はぎわら たけ】

### 日本のナイチンゲール

明治6年(1873年)当時神奈川県多摩郡五日市中下宿(現在のあきる野市五日市)に生まれる。明治11年(1878年)満5歳のとき、勸能学校に入学。

読書に励み、裁縫も得意で弟たちの子守もしながらも、優等賞を受賞するほど優秀であった。

向上心強いタケは、15歳から通信教育を受け、18歳で上京し、産婆学校に入学。通学、学費など厳しく1年足らずで退学し帰郷するが、あきらめきれず、明治25年(1892年)日本赤十字社の看護生徒募集を10月になって気づき、途中入学の嘆願書を提出。

嘆願書は認められなかったが、半年後の明治26年(1893年)満20歳の春、第7回生として入学を果たした。



娘時代

### 看護の道へ

入学後タケは、機敏で器用で気配りができる看護婦として信頼され、明治29年(1896年)6月の三陸大津波では災害派遣班にも選ばれており、「全国の看護婦の模範となる核となるべき」という言葉を胸に、看護の道を突き進む。

卒業後も日赤が行った救護活動などには必ず選ばれ、明治33年(1900年)(27歳)の北清事変では、病院船「弘済丸」の看護婦長となる。救護者の中にはフランス兵をはじめとする外国人も含まれており、このときの献身的な看護によりフランス政府から「オフィシェー・ド・アカデミー記章」を贈られる。

その後、明治36年(1903年)30歳でタケは看護婦副取締役となり全看護婦を統括するとともに生徒の教育養成に当たる。

## 医療 海老澤峰章 1851 - 1918

【えびさわ ほうしょう】



海老澤峰章

嘉永4年(1851年)3月18日に引田村(現在のあきる野市引田)に生まれる。代々名医であった海老澤家で生まれ、峰章は幼いときから漢学と書道を石川友益から学び、医術は父の俊斉に学んだ。

俊斉は13年医道研究に専心し30歳で開業した名医で、峰章は優秀な父から医学を学び、その名は名医、仁医として知られるようになる。

非常に親切で仁愛を持って接する峰章の元に、患者は常にいっぱいであり貧しい患者には無料

同然で診察していた。三多摩はもちろんのこと、山梨、神奈川、埼玉からも患者が訪れ、医院の近くには宿屋もできて、遠方からの患者は宿泊していた。

峰章は医術に限らず地方文化、社会、産業面の向上にも力を注ぎ、道路改修、橋の架設、神社仏閣など私財を寄付していた。特に菩提寺の宝泉寺の再建に尽力し、村民にとって欠かすことができない存在だった。

大正7年(1918年)4月17日、多くの人に惜しまれながら68歳の生涯を終るが、峰章が亡くなってから三十数年たった昭和の時代にも、山梨から「峰章先生の薬をいただきたい」とたずねて来る人がいた。

海老澤峰章の功績を称え、宝泉寺には碑が建てられ碑文には「父に就

いて医術を専修す。ことごとく家伝の秘訣を領し、その術神に入り、妙を究め、百診百中、医の癒えざる者無し、ゆえに患者は常に群集す」と記されている。

(参考文献)「秋川流域人物伝」・「郷土に光をかかげたひとびと」・「秋川市史」



宝泉寺 顕彰碑  
MAP H3

## もっと知りたいゆかりの地

### えびさわみち道標

MAP I2

峰章が夜中でも治療に通った道を、平井村(現在の日の出町平井)の人たちが「えびさわみち」と呼ぶようになり、明治25年(1892年)には平井村や菅生村の人々が峰章の功績を称えて平井村と引田村の間に31.5cm四方、高さ75cmの角柱の道標を建てた。道標は現在、千代原公園内にある。

道標には「ひきだ・えびさ・みち」の文字が読み取れ、「闇乃夜に 外さぬ 術や風光る」の句も刻まれている。個人名が道路名になった珍しい例。



あきる野市上代継130番地